

[総合的な学習の時間]

2年間の連続性を生み出す単元構成のための工夫

- 郷土の偉人「川上善兵衛」を題材にした単元開発から -

堀川 智子*

1 はじめに

平成20年に示された学習指導要領解説では、総合的な学習の時間を「探究的な学習」とし、「探究的な学習とは、物事の本質を探ってみ極めようとする一連の知的営みである」と記している。さらに探究的な学習における児童の学習の姿として「(1)日常生活や社会に目を向け、児童が自ら課題を設定する。(2)探究の過程を経由する。①課題の設定 ②情報の収集 ③整理・分析 ④まとめ・表現 (3)自らの考えや課題が新たに更新され、探究の過程が繰り返される。こうした学習活動をスパイラルに繰り返していくことが探究的な学習を実現することにつながる」と図式化して示している。すなわち総合的な学習の時間では、連続性を生み出すような単元構成を工夫し、探究の過程が繰り返されるような学習を展開していくことが求められる。

T小学校は、「日本のワインぶどうの父」として知られる川上善兵衛のふるさと、上越市北方を校区にもち、1903年、川上善兵衛が村長在職中に創設した学校である。川上善兵衛は、郷土の誇りであり、今もこの業績がこの地域で生きていることはもちろん、全国各地で川上善兵衛が品種改良したぶどうが栽培されている。さらに川上善兵衛の郷土発展への強い思い、行動力、勤勉さなどは、子どもたちが学んでいくにふさわしい価値ある学習素材である。川村知行は、『地域から考える総合学習』の中で「身近な素材からはじまって、次々と芋づる式に大物を発見してこそ、再び身近な地域にもどって意味を見いだし、地域の広がりや世界を知ることができる」と述べている。T小学校では、毎年3年生が学校ぶどう園で川上品種のぶどう栽培をしてきている。また、校区には川上善兵衛が作った「岩の原葡萄園」があり、川上善兵衛とかかわりのあるものが身近にあることなど、子どもたちが学習し、解決していく「場」が存在することは、地域から考える総合学習を展開するにふさわしい環境と言える。また、川上善兵衛と実際に交流のあった方や間接的にかかわった方も生存していることから、子どもたちが地域の方々から情報を得たり、ともに活動したりすることが可能であり、学習活動がより豊かになり、実感を伴うものになることが期待できる。

このように地域の人材や多様な学習素材を生かしながら進める「川上善兵衛の業績や生き方に学ぶ学習」(以下「善兵衛学習」)は、子どもたちの興味・関心を持続させ、様々な角度から連続性を生み出し、探究の過程を繰り返す学習活動が展開できるものと考えられる。

2 研究の目的

「善兵衛学習」では、郷土の偉人「川上善兵衛」に対する素朴な疑問から課題を設定し、地域の人材や素材を生かしながら学習活動を展開してきた。そこでは、相手意識を明確にしてまとめ・発表することにより新たな課題が設定されるという学習活動の連続性がみられ、それは学年を越えたダイナミックな取組に発展していった。本研究では、5～6学年の2年間の「善兵衛学習」の実践を振り返ることを通して、単元の連続性を生み出すための有効な手立てを明らかにする。

3 研究の計画

平成19年度から平成20年度までの第5・6学年の「善兵衛学習」の実践をもとに省察する。

(1) 「善兵衛学習」における①学習内容 ②学習方法 ③学習素材を児童の意識に寄り添いつつ、カリキュラムを発展的に構想していく。

* 上越市立高志小学校

(2) 本学級の児童の実態をふまえて、「善兵衛学習」を通して次のような力を育んでいく。

- 自ら課題をもち、多くの人やものとかかわりながら主体的に解決していくこと
- 調査活動を振り返り、自分なりの方法で伝え方を工夫し、表現し、発信すること
- 地域を見つめ、地域の方とかかわりながら、郷土「高士」に対する愛着をもつこと

以上のねらいのもと、2年間の学びのどのような過程、どのような手立てが、学びの連続性を生みだし、探究過程の充実に有効であったかを実践を整理することで明らかにしていく。

4 実践の内容

2年間の善兵衛学習カリキュラム（5～6学年）

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
5年	善兵衛さんってどんな人？		伝えよう、川上善兵衛のこと			善兵衛マイレポート		おもいっきり善兵衛に迫ろう			
	・インタビュー活動 ・インタビュー特集新聞作り		・JCV見学、川上善兵衛特集番組作り ・特集番組の放映			・わたしが見付けた川上善兵衛		・善兵衛を語る会の開催 ・善兵衛に迫る方法			
6年	～未来へつなぐ～ 善兵衛体験プロジェクト										
	品種改良体験		川上品種調査			・新品種をつなぐ		本にまとめる			
	挿し木体験		・論文を読む。現地調査			・メンデルのぶどうの木をつなぐ		・川上品種の挿し木を配布			
	メンデルの法則を学ぶ		川上善兵衛の足跡を訪ねて								
	善兵衛PR看板の設置		(山梨県 登美の丘ワイナリー, 小石川植物園, 勝海舟ゆかりの地見学)								

実践例1 「善兵衛さんってどんな人？」から「おもいっきり善兵衛に迫ろう」へ（5年）

子どもたちは、3年生でぶどうの栽培をしたが、4年生では、直接、川上善兵衛につながる学習はしていない。そこで、「善兵衛さんってどんな人？」と、川上善兵衛を知ることからスタートし、調査活動を通して川上善兵衛の生き方や業績に迫っていく単元を構成した。子どもたちの中にある善兵衛像をもとに資料調査、地域でのインタビュー活動を実施した。また、そこで分かってきたことを多くの人に伝えるために新聞作りや番組作りへと活動は連続していった。さらに、「もっと善兵衛のことを知りたい」という子どもたちの願いは、「おもいっきり善兵衛に迫ろう」と題した地域の人と善兵衛について語る会へと発展していった。

〈川上善兵衛のイメージマップを作り、課題を設定する〉

5年生の5月、初めて「川上善兵衛」を中心にして知っていることや興味・関心があることをイメージマップに書いてみた。川上善兵衛—ぶどう—品種改良—なぜ思いついたか？、川上善兵衛—北方に生まれた—葡萄園を作った—何のために？のように、書いたイメージマップをもとに疑問に思う部分に「なぜ？」と付け足していった。疑問に思ったことをそれぞれ短冊に書き出し、全員が書いた短冊を掲示し、話し合いながら分類して課題として整理した。「なぜ、北方でぶどうを作ったか」「なぜ品種改良をしたか」「どうやって何種類ものぶどうをつくることができたか」「なぜ雪室を考えたか」など、複数出された課題の中から一人一人、調べてみたい課題を選び、調べる方法や調べる順序などを決めて、課題解決に向かった。

〈善兵衛と子どもの感覚の「ずれ」からインタビュー活動、川上善兵衛特集番組作りへ〉

課題を解決していく中で「川上善兵衛さんってどんな人だったんだろう」という疑問がわいてきた。それは、子どもたちが考えることと善兵衛がしたこととの「ずれ」から生ずるものであった。善兵衛が貧しい農民のため、村の発展のために、私財を投げうってぶどうの品種改良やワイン作りを行ったことは、知識として理解できても、感覚的に納得できるものではなかった。そこで、「実際の川上善兵衛さんを知る人に聴いてみたい」という思いが強くなり、インタビュー活動を行うことになった。若い頃、岩の原葡萄園に勤めていた方や川上家の近所に住んでいる方、地域の郷土史研究家の方など8名の方のもとに子どもたちは、話を聴きに行った。

この時、子どもたちの課題は「川上善兵衛が『何を』したか」から「川上善兵衛は『なぜ』したか」へと善兵衛の生き方に迫るものとなっていた。このことにより、インタビューでは、単に善兵衛の業績や関係する事物にとどまらな

かった。人柄が分かるようなエピソードや普段の様子、葡萄園ではどんなことをしていたかなど、一人一人が善兵衛の人となりになる質問内容を考えていた。インタビューでは、「葡萄園では質素な服装で働いていた。お客さんに働いている人と間違われた」「葡萄園で働いている人にもいつもご苦労さんと声をかけていた」「神様みたいな人だった」など、その当時を知る方々はとてもうれしそうに生き生きと話してくださった。善兵衛と時代を同じくして生きてきた地域の方々は、その時代を真剣に力強く生きてきている。その言葉の重さは子どもたちの心を揺さぶり、「ぜひ多くの方に善兵衛のことを伝えたい」という思いにさせた。

この思いを実現させるために、社会科の「わたしたちの生活と情報」と国語科の「ニュース番組作りの現場から」の学習を教科横断的に取り扱い、「伝えよう、川上善兵衛のこと」という善兵衛学習の単元を構成した。情報の重要性和番組作りを学んだ子どもたちは、「川上善兵衛特集番組」として、地域の方や保護者が多く集まる文化祭で発表しようと番組作りに取り組んだ。初めに、地元のテレビ局「上越ケーブルビジョン（以下、JCV）」に出かけ、番組の作り方について指導していただいた。プロの方から「番組では、何を伝えたいのが最も大事である」ということを学び、「善兵衛の何を伝えたいのか、何のために伝えたいのか」を整理して、取材活動へと進むことができた。「善兵衛の人柄」チームは、「善兵衛の生真面目さや努力家であることと、地域の人が善兵衛をどう思っていたかを伝えたい」と、インタビュー特集新聞を読み直し、誰にインタビューをするか、どんな話をしてもらうか、そのためにどんな質問をしたらいいか考え、再度インタビューや調査に取り組んだ。

実践例2 学習の連続性と発展性を作り出す 「未来へつなぐ 善兵衛体験プロジェクト」(6年)

5年生の3学期に1年間の善兵衛学習のまとめとして、地域の方や岩の原葡萄園の方に来ていただいて「川上善兵衛を語る会」を開催した。会の目的は、今まで学んできたことをもとに一人一人が「私が見つけた川上善兵衛」を発表し、意見や感想をもらうこと、さらに川上善兵衛に近づくための方法がないか、ゲストティーチャーの方に相談することであった。善兵衛に迫るためにまず子どもたちが最初に考えたことは、善兵衛が一生をかけて行ったぶどうの品種改良を追体験することだった。「子どもには難しいのでは?」と思いながら岩の原葡萄園の社長に相談すると、快諾していただけた。この他にもぶどうの挿し木をする、雪室を作る、善兵衛の作った小学校の模型を作る、善兵衛のPR看板を作る、など様々な角度から迫る方法を子どもたちとともに考えた。これらのアイデアを活かして、6年生での「善兵衛体験プロジェクト」の活動を展開することを構想した。

〈品種改良の難しさを体で実感する〉

岩の原葡萄園の方から、品種改良の仕方や所要期間、成功率などについて詳しく教えていただいた。除雄作業（おしべをピンセットで取る）の日、子どもたちは、「善兵衛さんもきっとワクワクドキドキしながら品種改良を行ったのではないか」と考えながら、ピンセットと虫めがねを持ってぶどう棚へ向かった。しかし、除雄作業を始めると、ぶどうの一つ一つの蕾は予想以上に小さい。何本もあるおしべを取る作業は、難しくとても疲れる仕事だということが分かった。おしべを取る時にめしべを傷つけてしまったり、力が入って小さな枝を折ってしまったりと思うように作業は進まなかった。結局、1回の除雄作業では成功した数が少なく、計3回実施することとなった。



じょゆう
除雄作業

数日後、山梨県のサントリー登美の丘ワイナリーからシャーレに入れたメルロという品種の花が届いた。直接、めしべにメルロの花粉を振って付ける受粉作業を行った。受粉作業中も風が吹いていたため、他の花粉がつかないように受粉を行うなどの苦労が絶えなかった。品種改良は、一人30粒を3回、合計1800粒行ったものの、6月下旬に確認した時点で、受粉が成功し実になっているものは一房3粒から5粒ほどしかなく、合計で90粒ほどだった。除雄作業でも品種改良は難しいと感じていた子どもたちは、さらに受粉に成功することの難しさを実感した。女兒Aは、除雄作業後、「善兵衛さんは体力、根気があった」と実感し、作文にまとめている。男児Bは、1回目の作業の後では、「善兵衛さんは、努力家だ」と思いながらも「品種改良が好きだったのではないか」と考えていた。ところが、2回目の作業後は、「こんなに疲れるのに善兵衛さんは何でここまで農民のために尽くせたのか不思議だ」と疑問を新たにしている。

・ほくが品種改良をして難しかったのは、一粒一粒キャップ（花の冠 筆者注）を取るところです。キャップを取ろうとすると、粒をそのまま取ってしまったり、傷を付けてしまったりしたからです。やっている時は、肩が痛くなり休みながらやらないと、とても体力がもちませんでした。善兵衛さんは、こんな大変なことを1万回もやったなんてものすごい体力と根気があったんだと思いました。ほくたちは、簡単に品種改良と言葉に出すけど、実際にやってみるとその難しさや大変さが分かりました。（A児1回目の除雄作業後）

・5月30日に1回目の品種改良をしました。ぶどうのつぼみからキャップとおしべを取る作業でした。・・・私は、善兵衛さんがこんなに大変なことを1万回もしたと思うと、とても努力家だということがあらためて分かりました。善兵衛さんは、こんなに疲れることを1万回もしたということは、品種改良が好きだったんじゃないかと思いました。（B児1回目の除雄作業後）

・今回の品種改良では、前回と比べて比較的作業が早くできるようになりました。例えば、前は一粒やって疲れていたけど、今回は一房やってもあんまり疲れませんでした。でも、こんなに疲れるのに、善兵衛さんはなんでここまで農民のために尽くせたのか不思議です。（B児2回目の除雄作業後）（下線部筆者）

〈品種改良体験から「メンデルの法則」へ〉

「善兵衛を語る会」でお世話になった岩の原葡萄園の方に教えていただきながら、品種改良を実施した。初め、子どもたちは学校で栽培しているマスカット・ベリーAとデラウエアの2品種を使って交配しようと考えていたが、「善兵衛さんは、おいしいワインを作ろうとしてぶどうの品種改良をしてきた。デラウエアは食用品種なので、よい品種はできない。」と教えていただいた。そこでワインの原料となっているフランス原産の「メルロ」と交配することにした。改めてより良いものを作るという善兵衛の思いに気付かされる場面であった。

ぶどうの品種改良を体験して、川上善兵衛が学んだ「メンデルの法則」とはどんな法則なのかという課題が、子どもたちの中に浮かんできた。メンデルの法則については、5年生の頃から疑問としてでており、品種改良体験を通して単なる疑問であったものから、探究したいという実感を伴うものとなった。さっそく、図書館に行って百科事典で調べることになった。グループごとに協力しながら図書資料で調べたものの、まだよく分からないという子どもが多かった。そこで、元高校の生物の先生を講師に招いて、「メンデルの法則」について学習する機会をもった。子どもたちは、実際にぶどうの蕾の中のおしべを取る作業や受粉の作業を体験しているので、知識と体験がうまくかみ合い、真剣なまなざしで学ぶことができた。

・「メンデルの法則」では、ぶどうにも遺伝子があることが分かりました。最初は、動物だけが遺伝子をもっていて、親のある部分が子どもに伝わり、子どもが生まれると思っていました。その時に思ったことは、親のある部分が子どもに伝わるとしたら、いい部分だけでなく、悪い部分ももらってしまい弱点ができると思いました。そう考えるとマスカット・ベリーAのような雨にも病気にも強いぶどうを作るのは、きわめて難しいことだと思いました。

・私は、「メンデルの法則」はとても難しいものだと思っていたけれど、話を聴いて、とても楽しいものだと分かりました。ポプラディアの資料だけでは、独立の法則がよく分かりませんでした。けど、今日の講師の先生の話でよく分かりました。メンデルは、8年もの月日をかけて「メンデルの法則」を見付けました。メンデルは、善兵衛のように努力家だと私は思います。理由は、8年もかけて法則を見付けたからです。けれど、まったく評価されず、かわいそうでした。東京にあるメンデルのぶどうのある所に一度行ってみたいと思いました。（下線部筆者）

このように品種改良体験から「メンデルの法則とは何か」と課題が発生し、資料を調べたり、専門家に聴いたりする活動へと展開した。難しい「メンデルの法則」も体験を伴う実感的な理解を促すことができた。また、メンデルがエンドウ豆だけでなくぶどうの品種改良も行ったことや、その木が東京にあることを知ると、「ぜひ見たい」と子どもたちの知的探究心は高まり、東京小石川植物園のメンデルの交配したぶどうの木を見学する活動へと発展していった。

〈品種改良体験から川上善兵衛の論文へ〉

マスカット・ベリーAとメルロの品種改良体験や「メンデルの法則」を学んだことから、それぞれの良い部分を交配することによって、さらによりぶどうになるということに興味をもった。そこで、川上品種について調べようと、それぞれの品種の父と母はどんなぶどうか調べ始めた。それぞれの品種の父と母の名前は、川上善兵衛資料館で調べることができたが、どの品種も現在は栽培されておらず、資料が見つからなかった。そこで、メンデルの法則を教えてくださいと聞いた元高校の先生から、川上善兵衛の論文「交配に依る葡萄品種の育成」（昭和15年発表、日本農学賞を受賞）に詳しく川上品種について書いてあることを聞き、この論文を使って、調べることにした。古文のような論文をグループご

とに分担し、協力しながら漢和辞典や古語辞典、国語辞典などをひき、必死に読み解いていった。子どもたちは、「難しい」と言いながらも嬉々として現代語に直した。川上善兵衛の論文には、それぞれの品種の実や木の特性、糖度、酸味なども詳しく記述されていた。川上善兵衛の4品種（マスカット・ベリーA、ブラック・クィーン、ローズ・シオター、レッド・ミルレンニウム）を調べた後、岩の原葡萄園で4品種の実地調査を行った。ぶどうの色や形、重さ、糖度、味など、川上善兵衛の論文に書いてあるものと比較しながら、五感を使って調べた。子どもたちは、ぶどう畑で4品種を食べ比べ、川上善兵衛の品種改良の素晴らしい成果を体感していた。

・私は、より川上善兵衛に迫りたいと考えてぶどうの品種改良をしました。川上善兵衛が、日本農学賞をいただいた『交配に依る葡萄品種の育成』の論文から代表的な4品種「マスカット・ベリーA」「ブラック・クィーン」「ローズ・シオター」「レッド・ミルレンニウム」について調べ、私たちにも分かる現代の言葉になおしました。分からない漢字や言葉を国語辞典や漢和辞典を使って調べました。辞典にもものっていない言葉があって苦労しました。でも、楽しかったです。

・ほくは、川上善兵衛の論文を読んでみて、とても細かくメモをとってすごいいいと思いました。品種の特徴や実の形、におい、重さなど、たくさんのことを本当に細かいところまで書いてありました。糖分まで書いてあって驚きました。品種改良するために、よく難しい「メンデルの法則」を理解できたなど（外国の言葉なのに）思いました。（下線部筆者）

5 研究の成果と考察

2年間の善兵衛学習は、大きく次のような単元構成になっている。5年生では、川上善兵衛の業績や生き方について「課題、調査活動・分析、まとめ・発表」という過程を繰り返した。課題についてその都度、調査して分かったことを伝えるための発表活動を工夫し、課題解決を繰り返すことで、徐々に川上善兵衛の人となりについて理解を深めていく構成にした。6年では、追体験を通して川上善兵衛を深く理解していくという単元を構成していった。この2年間の善兵衛学習において、子どもたちの「川上善兵衛について知りたい」という意識が、途切れることなく連続的に次の課題へと展開していくために、次のことが有効に働いたと考える。

(1) 「なぜ？」という疑問を大事にする

『地域から考える総合学習』の中で、大悟法滋は総合的な学習の時間の目標である「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること」について「考える」ことこそ、学習におけるもっとも大切なことだと述べている。さらに「これはなに？ どうなっているの？ なぜ？ どうして？」という様々な「？」から「考える」という行為が生まれてくるとしている。本学級では、他教科の学習でも「なぜ？」を使った課題作りを行って読み取りや課題解決の学習を展開してきた。総合的な学習の時間においても、「なぜ？」から生まれてくる「これはなに？ どうして？」が、課題を設定する上でもっとも大切なキーワードとなっている。

川上善兵衛に対する素朴な疑問からスタートした「何をしたか」という調べ活動も、調べていく過程で善兵衛のしたことと自分の感覚との「ずれ」をもとに「何をしたか」から「なぜしたか」という新たな課題へと更新されていった。この「なぜしたか」という課題は、この後のインタビュー活動や番組作り、善兵衛追体験の場面でも出され、「もっと善兵衛に迫りたい」という子どもたちの意識を連続させる要因となった。

(2) 「体験すること」と「知識を身に付けること」の両面から学ぶ

体験的な学習活動は、子どもたちの知的探究心を育み、「もっとこうしたい」「これは何だろう」とさらなる活動へと発展していく原動力となる。善兵衛学習においては、品種改良や挿し木体験を通して、「メンデルの法則」を学んだり、川上善兵衛の論文を読み解いたりする発展的な学習活動を展開した。このような活動により知識は、体験に裏付けられたものとなり、交配することの難しさとそれに向けた善兵衛の強い思いを改めて実感することができた。

(3) 地域の方々や専門家と協同的に学ぶ

総合的な学習の時間において、地域の方々や専門家の方たちと協同的に学ぶことは、学習内容を広げたり深めたりするとともに、子どもたちに適度な緊張感と学習への責任感をもたせた。地域の大人の方々や専門家から教えてもらったり、ともに課題について考えたりすることによって、子どもたちは真剣にその課題について考え、自分の考えを大人の方に伝えようと伝え方を工夫したり、意見交換をしながら考えを深めたりした。本実践では、地域の方々、岩の原葡萄園の方、JCVの方、元高校の先生、そして山梨県のサントリー登美の丘ワイナリーの方など、大変多くの方々や協同的に学ぶことができた。

(4) 相手意識、目的意識を明確にしたまとめ・発表

まとめたり、発表したりする活動では、伝える相手を明確にして、その相手に何を伝えたいのか、どのように伝えると分かりやすいのか、考えながら進めていった。この「伝える活動」は、今までの学びを整理したり、分析したりするばかりでなく、自分の課題をより鮮明にしていくことにつながり、次の活動へと広げていくことができた。

(5) シートによる思考の整理

シートは、その単元ごと、活動ごとに子どもの思考が整理しやすいような形式で書いてきた。特に活動の振り返りの場面では、課題は解決されたのか、残された課題は何か、新たに生じた課題は何かと丁寧に振り返りを行い、その振り返りを友だちと交流し、新たな課題を設定していった。そして、それぞれの活動(単元)の終わりに、「川上善兵衛をどう思うのか」ということを必ず振り返るようにした。このように活動ごとに善兵衛への迫り方は様々であっても、その都度、善兵衛について自分の考えや思いを整理することで、善兵衛に対する思いが少しずつ追加され、さらなる追究へとつながった。

本実践は、「川上善兵衛」という素材そのものの価値の高さはもちろんのこと、前述の5つの手立てによって、子どもたちの追究意欲が持続し、2年間の連続した単元を構成できたと考える。6年生の3学期、卒業に向けて子どもたちと、2年間の善兵衛学習の最後をどうするかという話し合いをもった。今までの活動をまとめて、多くの人に見てほしい、自分たちの活動の記録として残したいということから、「かがやき善兵衛学習 ～未来へつなぐ 善兵衛体験プロジェクト～」と題して本作りを行った。2年間の活動の目的と内容、成果を入れながら、およそ70ページの本ができあがった。巻末には、全員が2年間の学びから、善兵衛の生き方と自分自身を振り返ったものを「善兵衛さんへの手紙」という形で掲載した。「善兵衛さんのことを知るまでは、めんどくさいとか言ってすぐやめたり、やっても失敗してすぐあきらめてしまったりしていました。あきらめないで品種改良をしたり、農民のために努力したりがんばることを教えてもらいました」「善兵衛さんは気力をなくしても何かいい方法はないかと考え、また復活しました。だからぼくは、気力をなくして挫折しても、そこであきらめるか、またそこからがんばるか、人間は変わっていくんだと思いました。ぼくは、そんなすごい善兵衛さんをもっと多くの人に伝えていきたいです」など、子どもたちは川上善兵衛の生き方と自分自身を振り返り、これからの生き方に生かしていこうと考えていた。

上越教育大学大学院生の久納が、中学校1年生になった子どもたちに「善兵衛学習」についての追跡調査を行った。その中で、子どもたちは、全員が「善兵衛学習に取り組んで良かった」と評価し、その理由として「進んで偉人のなぜ(疑問)を探すようになった」「善兵衛学習のおかげで、やる事全てを簡単にあきらめなくなった」「善兵衛を調べることによって地域の事も分かったし、調べる力もついた」「一つの物事をいろいろな面から見たり、調べたりできるようになった」などと答えている。このことから、2年間の善兵衛学習が子どもたちにとって意義あるものであり、自分自身の力になったと考えている事が分かる。

最後の成果として、教師自身の知的探究心を育んだ点を挙げたい。T小学校では、全職員で川上善兵衛の足跡を講師の方々とともに、歩いて確かめた。この「善兵衛研修」により、職員は地域素材をもとに総合的な学習の時間を構想することに大きな自信をもった。その結果、現在T小学校では、6つの学年の全てが、「善兵衛学習」に取り組み、学校全体が、様々な角度から川上善兵衛を対象とした学習を展開している。

6 今後の課題

今後は、各教科等の学習で身に付けた知識・技能等が一体となって働くようにカリキュラムを再編成するとともに、各教科の学習と関連させた効果的な単元構成を工夫していく必要があると考えている。他教科等の学習を一層関連づけることによって、さらに探究的な学習が充実していくものと考えられる。

参考文献

- ・文部科学省 『小学校学習指導要領解説』(総合的な学習の時間編) 平成20年8月
- ・川村知行編著 『地域から考える総合学習』 北越出版 平成15年 P11～P29 P102～P128
- ・木島 章 『川上善兵衛伝』サントリー博物館文庫 平成3年
- ・川上善兵衛 「交配に依る葡萄品種の育成」(『園芸学会雑誌』第11巻 第4号) 昭和17年
- ・久納 幸弘 「地域の偉人に学ぶ生活科・総合的な学習の時間に関する研究」 平成22年3月
- ・上越市立高士小学校 「平成20年度 研修のまとめ」 平成21年3月